

【コラム】防災リテラシーって何？

最近「防災リテラシー」という単語をよく聞かれる機会があるのではないかと思います。リテラシーとは「読み書き能力。また、ある分野に関する知識やそれを活用する能力」として説明されています。その防災版というのが端的な説明になりますが、防災における能力といわれても、ピンとこない方も多いと思います。この防災リテラシーは、自助や共助を高めるのにすごく大切なものなのです。今回は、この防災リテラシーの内容と、その高め方についてご紹介したいと思います。

まず、防災リテラシーには次の3つの要素があります。①驚異の正しい理解、②必要なそなえの実施、③とっさの行動への自信の3つです。それぞれについて詳しく説明し、それぞれを高めるためにはどうすればいいのかを述べていきます。

①の脅威の正しい理解ですが、要は自分たちの住むまちの抱えるリスクについて正しく把握し、正しく恐れましょうということです。ここで示したリスクとは、自治体が公開している被害想定やハザードマップから読み取れるハザード（災害因）だけではなく、地域やそこに住む住民、自分や家族のせい弱性との相互作用のことです。自治体の想定震度で揺れた場合自宅はどれくらい被害を受けるのか、首都直下地震や南海トラフ巨大地震が起きたらライフラインはどのくらい止まって自分たちの生活はどんな影響を受けるのか。単純に震度や津波高や津波到着時間を知るだけでなく、より具体的に自分の生活がどう影響されるのかについても理解する必要があります。より自分の生活に近い形で考えることで、多くの方は心配したり怖がったりします。ただ災害が来ることを恐れるのではなく、この恐れに立ち向かうために自分たちで、地域で、行政と連携してそなえる必要があると自覚してもらうきっかけになります。驚異の正しい理解を深めるためのツールやしかけは、防災業界には数多くあります。各自治体が公開しているハザードマップやそれを用いたDIG訓練、災害が起きた時の自分をより具体的に想像するのには、目黒巻やクロスロードが活用できます。

「あなたのまちの直下型地震」は家屋や人的被害だけでなく、ライフラインへの影響について、南海トラフだけでなくオリジナルの地震についても想定を見せてくれるツールです（現在サーバー調整中とのこと）。これらのツールをうまく組み合わせて、災害に対して正しく恐れてもらうことが、防災への啓発の第一歩だと思います。

②の必要なそなえの実施は、大きく分けると2つに分類されます。備蓄や防災倉庫のような物質的なそなえと、家庭内での相談、地区防災計画や避難所運営マニュアルといったソフト的なそなえの2つです。物質的なそなえは比較的实施しやすいのですが、ソフト的なそなえの実施には住民と行政を中心とした関係機関の協働が必要なため、ハードルが高いと感じている地域も多いと思います。地区防災計画も避難所運営マニュアルも、地域住民が主体性をもって実行しないと実のある内容にはなりません。自治会など住民組織だけで作成するものではありません。避難所となる学校や施設、地域にある企業や団体が話し合いの場に参加する必要があります。行政がそういった多様な関係者同士の話し合いの場を作って導いていくことが、これからの防災・減災ではとても重要なことです。

③のとっさの行動への自信は、訓練に参加して実際に体に覚えこませる、この一点に尽きます。マニュアルや計画でいかにシミュレーションを重ねてそなえていても、いざという時に動けないと意味がありません。人間のとっさの行動は、常日頃の行動に強く影響されます。いざという時に正しく行動できるようにするためには、避難訓練やシェイクアウト訓練に積極的に参加し、実際にやってみることを積み重ねていく必要があります。

これら 3 つの要素すべてがそろって、防災リテラシーが高められます。防災リテラシーが高ければ、災害に関する情報に対して正しい判断をし、正しい行動を選択することができます。この防災リテラシーを高め、自助と共助を整えていくことは、行政が行うべき公助の中でも非常に重要なものです。災害は、誰かが頑張れば何とかなるものではなく、被災地全体の総力戦になります。少しでも戦力が上がるよう、不断の努力が必要です。

出典「阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター メールマガジン
Vol. 202 (2018 年 3 月 15 日発行) 研究員コラム」